７５「有 吉」

何年も前に実家から運んできた新潮社「日本文學全集」全７２巻、ほとんど手付かずのまま私の家の書棚に並べられている。

生前、父が毎月一冊ずつ発行される新刊を買い集めたものだ。

第一巻「二葉亭四迷集」から始まり、著名な作家はほぼ網羅されている。

先日、最終第７２巻「名作集（四）昭和編・下」を読み始めた。

・肉体の門（田村泰次郎）
・夏の花（原　民喜）
・デンドロカカリヤ（安部公房）
・鶴（長谷川四郎）
・愛玩（安岡章太郎）
・小銃（小島信夫）
・太陽の季節（石原慎太郎）
・地歌（有吉佐和子）
・岩尾根にて（北　杜夫）
・楢山節考（深沢七郎）
・夜の波音（阿川弘之）
・パニック（開高　健）
・天使の生活（中村真一郎）
・飼　育（大江健三郎）まで読み終えた。

以降、装飾評伝（松本清張）、娼婦の部屋（吉行淳之介）、坑木置場（井上光晴）、海の見える芝生で（曽野綾子）、飛ぶ男（福永武彦）、家の中（島尾敏雄）、静物（庄野潤三）、四十歳の男（遠藤周作）、傷だらけのパイプ（三浦朱門）と続く。

戦後２０年間を代表する作家の代表作、それも短編に限って集録されている。中には、文壇に登場して数年、まだ評価の定まっていない作家も含まれている。

「夏の花」「鶴」「小銃」「飼育」など戦争に関連した作品が多いのは、時代を反映しているといえるだろう。不思議な作品に思われたのは、大江健三郎の「飼育」である。墜落した敵機から落下傘で降りてきた黒人兵を村人が“飼育”する物語で、主人公を含む村の少年たちが捕虜を“飼育”していく間に、黒人の中の「人間的なもの」に気づき始め、徐々に人間的な絆で結ばれていく、、、、という物語である。

これらの小説の中で特に印象に残ったのは、有吉佐和子の「地歌」だ。解説をみると、これは彼女のデビュー作だった。箏曲界の大立者、無形文化財の栄誉を受けた大検校の父と、その教えを受け閉鎖的な邦楽の世界に生きる娘との物語。

娘は、父の大反対を押し切って米大使館に勤務する日系二世と結婚し、いよいよアメリカに渡る日が近付いている。父に勘当された娘は、自分の複雑な胸の内を伝えようと何度も手紙を渡すが、父は全く読もうとしない。盲人の老名人は、地位も冨も獲てはいたが、字は読めなかった。点字も習っていない。

本当は手紙の中身を知りたいに違いないが、意地で弟子にその手紙を読んでもらうこともしない。頑固一徹の父と娘の間には凄まじい葛藤があった。

ある日、西洋音楽を習っているという若い娘が、母親に連れられてやってきた。

「唄を聴け言うんやろうが。通し」

門弟の又弟子で、余技としてでなく、本職になりたがっている優秀な娘がいるという話があり、一度聴いて貰いたいと頼まれてあったのである。二十歳前後の娘とその母親は、無形文化財の前におずおずとかしこまったが、（弟子の）新関がうながすと母親の方は立板に水となって、どういうわけか娘が三味線に夢中だということ、娘の先生は才能があるというがお世辞かもしれず、それを真に受けて道を誤らせたくないこと。ついては是非先生に聴いて頂いて、忌憚のない御批評を仰ぎ、その上で娘に決心をさせたいと言った。

こういう手前勝手な考え方は寿久（大検校）の最も嫌うところである。これも又、当世風か。物事を始める前に成功の如何を問題視する用心深さは、利口な人間のすることで、芸の神髄にそうした利口さでは到達できないのだ。

「御本人は、どないに思ってるんです」

「私、やれるだけやりたいのです」

はきはきと答えたのが気に入った。

「ま、聴かせて貰いまほか、なんでも、そやな、『黒髪』やってみなさい」

流石に自分の三味線は用意してきていた。爪弾きで三本の糸の調子をみているのが微笑を誘った。一生懸命らしい。音感は悪い方ではない。緊張しているためか、出だしに聊か落着きを欠いたようだが、やがてかなりの自信で唄いだした。

黒髪の
結ぼれたる想いをば
とけて寝た夜の枕こそ
ひとり寝る夜の
あだ枕

声も悪くはない。これなら成程菊岡は褒めちぎったろうと思った。しかし、上手いというには気にかかる節がある。音の良さは先ず感じ、音のとり方は正確なのだが「間」のとり方が気に喰わなかった。唄も節まわしは合っているのだが、音のすくい方に疑問がある、聴くうちに、地唄の肌合いとは異質なものに躓き始めた。

「よろし。もう止めてよろし」

中途で止めさせて、言った。

「あんた、西洋音楽やったんと違いますか」

「はあ、ピアノをやらせておりましたんですが、一昨年から自分から三味線やりたいと申

しまして」母親をうるさく、
「ピアノと、三味線の違い分りますか」
「はい」
「何が違いますか」
「あの、三味線の方が、あの、難かしくて。ピアノは譜の通りに弾けば、一応の音が出て音楽らしくなりますのに、三味線は譜ではてんで曲になりません。それが私には魅力なんです。心だとか息だとかうまく言えませんけど大袈裟な表現をすれば機械文明に反発するようで好きなんです」ひたむきに喋べり始めた。
「友達で三味線を弾く人ありますか」
「無いんですの。でも皆、不思議な音楽だって言います」
「古い、と言われたりしませんか」
「言われません。洋楽は後から日本に入ってきたので、それで三味線は古いと一概にけなされたムキがあるんじゃないでしょうか。反対にこの頃は外国の音楽家に印象派音楽として注目されたりしてるのですし。ピアノやヴァイオリンと質の違うものを、古い新しいと言い較べるのは間違ってると思います」
これは案外論客だったと、寿久は興味を覚えた。邦枝（娘）もこの年にはこういうことを言い立てて、しきりと自分の仕事の意義を理屈づけていたものだ。
「質が違うというのは、どういうことです」
「生意気なようですけど、あの、洋楽は音の表を拾って行き、地唄は音の裏を拾うような、そんな気がするんです」
「なるほど」
「あの、陽の当る音と、当らない音って、言いたいのですけど」
寿久は脳裡に閃いたものがあった。急に口早く言った。
「二階の部屋で、もう一曲聴きまほ。お母さんは遠慮して貰います」
自分の三味線を武器のように持って、菊沢寿久が女子大生を従えて階段を登って行くと、階下に残された母親と新関が顔を見合せた。

（略）

二階では和久が自分でスイッチを入れ、部屋を明るくした。
午前十時を過ぎたばかり。雨戸を閉めきった部屋には冬場のシンとした冷たさの中に奇

妙な空気のたるみがあった。陽光を故意に拒んだ部屋と、盲目の人が電灯を点けた異様な光景に、若い子は胸を衝かれている。
「あんた大学へ行ってるそうやが」
「え。はい」
「道理でな理屈は達者や。そやがな」
「はい、分ります。地唄ほど理屈の通らない音楽はないと思っています」
つい笑って、寿久は降参した。
「偉いな」
くすくすと娘も笑った。
「偉い人に済みませんが、この手紙読んで貰えませんやろか」
寿久は懐から取出した封筒を渡した。
「その後で『葵の上』を弾いて下さい」
若い子は私信を読む光栄に感じて素直に封を切った。

楫枕うかがいました。これでお父様の演奏にはお目にかかれなくなると思うと、感無量でございました。不孝の身が、不肖と共に愧かしく、楽屋に御挨拶には出られませんでした。
十二月四日、夜九時のパン・アメリカン機にて羽田を発ちます。丁度ハワイに演奏旅行なさいます岩城先生御一行と同じ飛行機になりました。カリフォルニヤにもお出でになるかもしれぬ由にて、その節は琴でお手伝いさせて頂けそうで、何かとお世話になることと存じます。到頭何一つお父様のお気に召すことは出来ず仕舞に日本を離れてしまう自分の不甲斐なさが、悲しゅうございます。お傍に伺えない惨めさが、いっそアメリカまで離れたなら無くなるものかと思ったりしておりますけれども。
子としてお尽しすることもなく口幅たいと思し召しましょうが、御健康を心からお祈り申上げております。書きたいこと、聞いて頂きたいこと、胸に溢れるほど多くありましても日の迫りました今は、とても叶いません。ただ不孝をお詫びするばかりでございます。

父上　様　　邦　枝

読んだ娘は重大な意味を悟って、音をたてぬよう気づかいながら便箋を畳んでいる。
「『葵の上』はでけますか」
「はい。出来ます」
催促されて、三味線を構え呼吸を整えて弾

きはじめた。暗い嫉妬の曲である。
時々呼吸困難になる演奏の中で、寿久はじいんと痺れていた。十二月四日は今日だ。今夜、邦枝は日本を離れるという。十二月四日。夜の九時。飛行機。羽田。突然今日発つという。爆音が耳をつん裂くように聞こえた。飛行機。アメリカ。琴。岩城幸男。カリフォルニヤ。羽田。夜の九時。今日。雹を叩きつけられているようだった。火の気のない部屋は酷く寒い。
ふと気がつくと、「葵の上」は終って、娘は膝の手の置き場に困っているようである。
「音曲は簡単な道やない。殊に、あんたのように洋楽の勉強を先にしたいう人は、初めから洗い直す気にならなあきません。ピアノを忘れてからやないと地唄のマは拾えませんで。音も大切やが、三味線や琴はマが魔物や」
「はい」
「よう考えて、やるか止めるか自分で決めなさい。生半可な覚悟ででけることやないよってにな」
「はい」
「若しどうでもやる気やったら明日でも又来なさい。その上で腕の批評をしたげます」
大検校の厳かな声と、盲目の顔の前で難曲を弾いた経験と、そして実の娘の現況を知ったこととが、女子大生を考えこませてしまったようである。
母娘が帰ったあと、寿久は居間でひっそりと坐っていた。何もしなかった。
昼食の膳が運ばれてきた時、彼は新関に言った。
「岩城さんがハワイに行くのやて？」
「そうだそうですね」
「見送らな不可んな」
「はあ？」
「七時にハイヤー呼んどき。羽田へ行く」
「今夜ですか」
「そうや。飯は一人で喰うで。行き」

頑固一徹な父も、遂に娘を見送りにハイヤーで羽田に向かう。
ここからがこの小説のクライマックスだが、興味が湧いたなら是非読んでみて欲しい。

深刻な物語なのに、なぜか不思議に明るいのがこの作家の特徴のように思う。

この小説が気に入ったので、有吉佐和子の作品を読んでみたくなった。
有吉佐和子といえば「恍惚の人」「複合汚染」など、社会問題を取り上げた一群の作品があるが読んだことはなく、まず代表作の「紀ノ川」を読んでみた。

以下は、主人公“花”の娘「文緒」と義弟「浩策」との会話

「生命力というもん知ってるか」
「言葉の意味やったら知ってます」
「生命力のあるもんは強い、ないもんは弱いちゅうことやな」
「はあ……」
「お前はんのお母さんは、それやな。云うてみれば紀ノ川や。悠々と流れよって、見かけは静かで優しゅうて、色も青うて美しい。やけど、水流に添う弱い川は全部自分に包含する気や。そのかわり見込みのある強い川には、全体で流れこむ気魄がある。
昔、紀ノ川は今の河口よりずっと北にある木ノ本あたりへ流れとったんやで。それが南へ流れる勢いのいい川があって、紀ノ川はそこへ全力を注いだんで、流れそのものが方向を変えてしもうたんや」
含みの多そうな言葉だけに、文緒は叔父の言葉を安直に理解するのは控えたかった。肯きもせずまっ直ぐに浩策を見守っていると、彼は猶も云い継いだ。
「本家の御っさんは、わしを包含する気やったよ。そのために、ウメまで抱きこもうとしよった。ほ、わしもウメもたいがい生命力の弱い川と見込まれたらし。やけどな、紀ノ川の傍にも鳴滝川のよに、添うと見せて仲々呑まれん細い川もあるんよ。わしらがそれや。文緒が訊いた仲の悪い理由ちゅうもんやろかい」
「叔父さん、そやったら私も鳴滝川やの。十八年育てられて、いっこもお母さんの思うよに育ってえしません」
「そやよって、わしと文緒は気が合うんやろかいよ」
「そうでしょな。私もそう思いますわ」
「……わしが見込みのある強い川ちゅうたんは誰のことやと思う」
「お父さんのことですやろ。末は大臣やとお母さんは云うてます。やから大事にせなならんのですと」
「大臣か。和歌山の県会議長も大したもんや」
浩策は、鼻の先でふんと笑った。

中には、早稲田に関する記述もあった。

十月十日には戦況は前途遼遠、堅忍持久を要すという詔勅が降っていたが、同じ月の三十日には野球の早慶戦が華々しく行われたと和歌山の地方紙にまで大きく報道されていた。
「見い、一高時代はすでに去るとあるで。早稲田万歳やないか」
と、そのときの敬策の興奮ぶりはなかった。古今の文芸に通じ、国際情勢などについてもかなりの知識を持つ花だったが野球ばかりはとんと分らない。東京専門学校が早稲田大学と改称していたから、敬策は母校の勝利に酔っているのだろうぐらいにしか理解できなかった。

面白いと思ったのは、この時代この地方の話言葉である。

花には姑の眼が気懸りで、
「美味しゅございますのし。これ頂いてから大同寺さんへお詣りして来ましょ」
「私の眼かいし。三年詣り続けて効験ないのんに、もうおいといて頂かしてよ」
「ほやかて、お正月ならお薬師さんも気張ってくれますやろ。行て参りますよし」

和歌山に生まれた有吉佐和子は、紀ノ川のほとりに古くから住みついた、父母の旧家の血への思いが深く、そのことが彼女に伝統を意識させ、古風な社会を題材とした作品を生ませた。

紀州の旧家を舞台とするこの小説は、明治，大正，昭和を生き抜く主人公の『花』、その子『文緒』、孫の『華子』の物語。三者はそれぞれ三様の性格の持ち主である。主人公の『花』を一言でいうとすれば「しなやかさ」だろう。しなやかは強さでもある。三つの時代、その中には戦争もあり、波乱万丈の人生が描かれ、この作家独特の筆致で書かれた名作だ。

（２０２０．０１．０５）